



静かなぬくもりのあふれるなか、
 アートの輪は広がる。

木々に囲まれたその家は、いかにも静かな佇まい。けれども歩踏みこむと、華やきがあふれている。カラフルで、造形的な個性たちが独特のハーモニーで合唱しているかのよう。ここは、森本せつさんのアート作業場であり、ふれあいの場でもある。そもそもは大阪の人だ。四十年ほど前にオランダを訪れて、アッセンデルフトというオランダ発祥のフオークアートに出会い、その自由な描法に惹かれた。さらに、型紙を切り抜いて絵の具をのせていくステンシルアートも本格的に始める。帰国し、興味を示す人に手ほどきをしていると、さあ、それからが大変。自分でも思いもよらなかったほどの多忙な日々が何十年もつづくことになる。あつちの教室、こっちの公民館、まさに駆けずり回る日々。

「もうこのへんで、卒業しましょうと思いましたが」

それが、夫婦で湯梨浜町移住へのきっかけといえる。三十年ほど前から別荘として馴染んでいたこの地で、のんびりと。が、そう簡単にのんびりといかなかったのは、ご本人の手柄のせいだろう。人を引き寄せた。そして、やはりアートを媒介とした輪が広がっていった。どんどん広がる。結局は忙しくなった。

「かつて、自家製のおだんごを売る峠の茶屋に憧れたこともあったものだった。あるときだれかがこう言った。「あなたはすでにそれをやっているのよ。おだんごのかわりにアートでね」

ステンシルアート
 森本せつ



ゆ
 う
 ゆ
 う
 り
 は
 ま